

【フィールドワーク通信】

日本の温泉街のタイ人ニューハーフショー ——日泰を結ぶガトウーイの人類学的研究へ

今井 一貴（早稲田大学文学研究科文化人類学コース）

“Newhalf” show from Thailand in a Japanese Hot Spring Village ——Toward an Anthropological Study of *Kathoey* in the Context of Japan-Thai Relations

Kazuki Imai

1st Year Master's Program, Department of Anthropology, Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University

ABSTRACT

This paper aims to report on field research conducted twice last summer on the Thai “newhalf” (commonly referred to as “ladyboy”) show, which has intermittently been performed for over 20 years at a hotel in a hot spring resort in Japan. Additionally, the author presents prospects for future studies on Thailand’s *kathoey* (ladyboys) community. Through this research, the author observed the unique intimacy between Thai *newhalf* performers and some enthusiastic Japanese fans of the show, including local residents. Although such cases are likely rare and exceptional, these observations provided valuable insights for a prospective ethnographic project. This future project seeks to examine and portray how and where Thai *kathoey* meet and interact with Japanese people, contextualized within the historical backdrop of Japan-Thai relations since World War II. Notably, the presence and experiences of *kathoey* in relation to Japanese individuals have been largely overlooked in academic studies to date. Addressing this gap is the central objective for the author’s research.

はじめに

本稿では、2024年8月20、21日及び、翌月9月27、28日の2度、計4日間、日本の某有名温泉地内のAホテル¹⁾にて公演中の「タイ人ニューハーフショー」について、筆者が現地でも観察した内容を報告した上で、その考察を通して筆者がこれから進めようと考えた研究の展望を示す。

タイのニューハーフ、いわゆるレディーボーイ（用語については後述）に関心を持ち、人類学の分野で研究しようと考えていた筆者は、タイ本国で調査する機会を持つ前に日本で当事者に接触できそうな場所はないのかと調べていた。その矢先、誰もが知る有名な温泉地のAホテルでタイ人ニューハーフショーが行われている事実を知った。しかも、20年以上の歴史があるというのだ。筆者は、夏季休暇を利用してAホテルのある温泉街に行くことを決め、上記の通り都合2回の調査を行った。諸々の制約により、本稿で開示できる内容については限りがあるが、その範囲内で描き出したフィールドの様相のなかから、筆者が見いだした研究の萌芽を読み取ってもらいたい。なお、ここで紹介する事例はタイ人ニューハーフショーのあくまで一例であることを言い添えておく。

1. 「タイ人ニューハーフ」とは何か？

調査報告に入る前に、「タイ人ニューハーフ」と呼ばれている人々について、人類学の立場から少し説明を加えておきたい。タイ本国に男性から女性への性別越境を行ういわゆる Male to Female (以下 MtF) のトランスジェンダーないしトランスセクシュアルが多いことは国際的にも有名であるが、タイでそうした人々を呼ぶ際に用いられる言葉に「ガトウーイ (kathoey)」と「レディーボーイ (ladyboy)」というものがある。

ガトゥーイは、男性 (*phuchai*)、女性 (*phuying*) と並ぶタイの性別 (*phet*)²⁾ カテゴリーの1つとされてきたものであり [Morris 1994: 19–20]、かつては男女問わず、出生時に与えられた性別のジェンダー規範とは合致しない装い (異性装) やふるまい、また性行為をする人々を広く含めていたようだが、後に、出生時に与えられた性別が男性で、服装や身体を女性化する人を主として指すようになった [Jackson 2000: 409]。トランス女性としてのガトゥーイを、いわゆる性別適合手術 (性器再構築手術) をどこまで進めているかによってさらに下位カテゴリーに細分化することもあるが、一般には厳密な区別はなされず、当事者のなかには男性器の有無をアイデンティティと結びつけることを嫌うものもいるようだ [Käng 2012: 477]。セクシュアリティの観点からすると、ガトゥーイの性関係は主に男性が相手だが、男性同性愛者を意味するゲイ (*gay*) とは区別される。それは、60年代後半から70年代にかけて、ゲイという新しいカテゴリーがタイで普及するのに応じて、シスジェンダー男性のゲイと女性的なガトゥーイとが明確に差異化されたからである [Jackson 1999: 395–401]。

さて、このガトゥーイの他にもトランス女性を表す言葉がタイにはいくつかある³⁾ものの、そのほとんどは学術論文で言及される場合などを除き、まずタイ国外では用いられることがない。その一方で、「レディーボーイ」は例外的に国際的な知名度をもつ言葉である。その使用がいつから、どのようなにはじまったのか、筆者ははまだ詳らかにできていないが、レディーボーイは主にキャバレーショーのパフォーマー、美人コンテストの参加者、あるいはバーで男性客の接客をしたり、性交渉の取引に応じたりするセックスワーカーなどを含意している⁴⁾ [Käng 2012: 477]。これは、レディーボーイがガトゥーイのなかでも、観光やメディア露出を通して外国人の目にふれる機会の多い職種についている人々を特に指す言葉であることを示唆している。そのため、主に外国人が用いたり、また外国人と接する場面で当事者が用いたりすることで、レディーボーイは国際的にも普及していったとみることができよう。海外メディアでも使用されており、結果的に、通俗的なレベルでは、外国人にとってはレディーボーイこそがタイのトランス女性 (ガトゥーイ) の代名詞になっていると考えてもよいだろう。

しかし、日本国内ではそのレディーボーイも、むしろ「ニューハーフ」と呼ばれることの方が多いうようだ。これには今述べたレディーボーイという言葉の意味と関連する理由がある。日本では、トランスジェンダーという言葉が国際的に普及しつつある今日においても、昔からある「ニューハーフ」と「オカマ」という言葉が通用しており、タイに限らずどこの国の人でも、今ならトランス女性とラベリングされる人を「〇〇人ニューハーフ」、「〇〇人のオカマ」と呼び習わしてきた。その上、「接客業 (ホステス)、ショービジネス (ダンサー)、性風俗産業 (セックスワーカー) などに従事している人たち」など、現代日本においてニューハーフと言うときには「性別越境 (トランスジェンダー) を職業上の特性とするプロフェッショナルな職業集団」 [三橋 2004: 192–193] を指すことが多い。ということは、ニューハーフはレディーボーイと職業的に共通していることになる。そのために、国際的にはタイのトランス女性の代名詞と化したレディーボーイも、日本では慣用されてきたニューハーフの名で呼ばれてきたと考えていいだろう。ちなみに、ガトゥーイの全てが上記の職業についているわけではない⁵⁾ という事実には留意が必要であることは言うまでもない。

ところで、研究においてはこうした人々をどの言葉で呼ぶかということは決して小さな問題ではない。日本で用いられている「タイ人ニューハーフ」のラベルを避け、本場のガトゥーイやレディーボーイの語で一般化することは、かえって個別の状況を具体的に把握することを妨げるかもしれない。タイを訪れたり、タイに住んでいる日本人が昔から多いためにニューハーフという言葉が早くからタイ国内にも輸出され、現地のバーでも目にしたり、耳にしたりするほど浸透している状況を踏まえると、その言葉一つにタイと日本とのこれまでの歴史的な関わり的一端が映し出されていると言っても過言ではない。こうした観点から、本稿でも今回の調査内容の報告のなかでは原則「タイ人ニューハーフ」を、それ以外では主にタイのトランス女性一般を指すガトゥーイを用いることにしたい。

2. 温泉街のタイ人ニューハーフショー

さて、今回調査で訪れたAホテルは、温泉街を貫流するH川の両岸に形成されている中心街からはやや離れた右岸の高台に立っている。車で温泉地に入り、川沿いの街道から脇にそれて伸びる坂道を登って行くと、その途中で

早速「魅惑のニューハーフ・エンターテインメント!!」「Amazing Thailand」の文字が躍る色鮮やかな看板に出迎えられ、そこからもう少し登ると間もなく、ホテルのロータリーへと導き入れられる。玄関脇にも先と同様の看板があり、玄関を入るとフロントの脇のモニターにショーの模様を伝える動画が流れ、エレベーターの脇にはポスターも目に入る。来館した宿泊客の動線に沿って広告が配置されているあたりが心憎いところである。

事前の求人サイトのリサーチによれば、Aホテルは既に創業40数年以上の老舗だが、その新館7階にAシアターができたのは2000年12月のことである。そこを舞台に既に20年以上に渡りタイ人ニューハーフショーの公演が行われているのである。始まった経緯や来歴については明らかにできていないが、後にシアターにいた従業員の方からダンサーたちの話を少し聞くことができた。出演しているのはタイ現地での公募に応じ、オーディションを通過してきたプロのショーダンサーたちで、興行ビザを得てこの地にやってきて、ホテルの寮で集団生活をしながら専業で夜の舞台に立っているとのことである。6か月のビザが切れると公演はいったん中止となり、ダンサーたちはタイに帰国するため、興行自体は断続的に続けられていて、公演の再開時にはメンバーが入れ替ることもよくあるという。筆者の調査時点でメンバーは13名いたが、既にAシアターに立ち始めて長い年月になるベテランもおり、中でもショーの創始当初からいる最古参のメンバーがリーダーを務めているとのことであった。ちなみに、メンバー全員がいわゆるニューハーフなのではなく、一貫して男装の男性ダンサーも数名入っている。こうしたメンバー構成はタイ本国のショーでも同様である。

ショーの客は見たところ性別、年齢を問わず多様で、小さな子供連れも見かけることも少なくなかった。また、宿泊客以外でもお金を払えば観ることができ、温泉街での聞き込みの際、忘年会や新年会でAホテルのレストランを利用し、その2次会でショーを何度も観たことがあるという地元民に複数出会ったが、「楽しい」「綺麗だ」というコメントが多く、地元にも十分に浸透していることが感じられた。後にも触れるが、なかにはファンになって、足繁くショーを観に行く地元民もいる。

ショーは現在19時40分からと21時10分からとの2部制（各45分間）で、第1部と第2部ではオープニングとエンディング以外は内容が異なっている。演目は、タイ本国と同様、音楽に合わせたダンスといわゆる口パクのパフォーマンスがメインで、中には観客の笑いをとるためのコメディ要素を含んだものもある。本場のショーの要素も多分に取り入れており、例えば日本の演歌、歌謡曲を用いたパフォーマンスがいくつかある。これは日本人観光客が昔から多かったことを反映しタイ本国で今も続いている趣向である⁶⁾。また、ダンサーが右半身は女性のドレス、左半身は男性のタキシードになっている特殊な衣装を着て、男女のデュエットソングを一人二役で口パクするという趣向の演目⁷⁾があったが、これもパタヤのアルカザール(Alcazar)というシアターで同様の出し物が行われているようだ⁸⁾。このように、日本にいても本場タイのショーの雰囲気を楽しめるように工夫されていることがうかがえる。こうした演出の工夫とダンサーたちの質の高いパフォーマンスが合わさり、Aシアターのショーは見事なエンターテインメントとして成立しているのである。

次に、Aシアターには大きな特徴だと思われる点が2つある。1つは、シアターのキャパシティ、またステージと客席の作りについて、もう1つはチップのシステムについてである。

まず、Aシアターはホテル内に後から作られたという都合もあり、タイ本国のシアターやキャバレーと比較すると規模が小さい。例えば、バンコクの有名なカリプソ(calypso)のキャパシティは約500席で他の大型シアターよりも小規模だが、Aシアターにはその3分の1ほどの席しかないと思われる。しかし、このシアターの小ささは決して欠点ではなく、むしろこれから説明するようにショーの性質上適当なサイズになっている。

Aシアターのステージはステージとはいいつつ、客席から一段高い舞台が設けられているのではなく、フロアをそのまま用いており、客席と同じ高さでフラットにつながっている上に、コの字型に設置された前列の客席と背景の幕に囲われたその方形の空間は、10数名のダンサーが同時に出てくれば窮屈になるくらいの大きさであるため、ショーの最中ダンサーは文字通り目の前までやってくる。

そして、このダンサーと観客との距離を更に縮めることを可能にしているのがチップのシステムである。チップは4枚/1,000円(9月訪問時)のセットで販売されており、ショーの最中にチップを掲げることで目当てのダンサーを席まで呼び寄せることができ、写真を一緒に撮ることができる。筆者も購入し、初回はショーが始まってか

ら様子をうかがうことにした。すると、偶然その回はいわゆる常連が複数観に来ていたようで、そのためらいのないチップ捌きに促されて一見の客たち（筆者を含め）も次第にチップをにぎる手を上げ始め、会場全体が活気に溢れた。ダンサーと客の距離が自然と縮まるAシアターのサイズと作りは、このチップの授受がどの席でもうまく運ぶために実に適したものになっている。タイ本国の大型のシアターでは生まれないニューハーフダンサーと客との距離感が、このAシアターでは体験できることが一つの大きな特徴だ。

また、Aシアターの独自性という観点では、客の服装がもたらす効果も面白い。Aシアターではドレスコードを設けていないため、そこが温泉旅館であるという性質上、自ずと館内着代わりに浴衣の客が多くなる。客はホテル内の食事会場や大浴場から着流しのまま、リラックスした気分でシアターまで足を運ぶことができるのだ。そのカジュアルさは客の心理にくつろいだ気分をもたらし、シアターの小ささやステージと客席との近さと相まって、ダンサーと客との距離感を縮める効果を持っているように見えた。

3. ダンサーと客との関わり

ここまで説明したのはショーの簡単な概要とAシアターの特徴である。続いて、筆者が気になったショーの常連たちの存在について触れ、そこから考察と展望を引き出してみたい。

初回の調査で筆者は、二つのタイプの常連に偶然出会った。一方は、当初互いに面識はなくばらばらにショーを観に来ていたのがいつ頃からか顔見知りになり、一緒に来るようになってもう何年もたつという女性3人組で、もう一方は永年足繁く通う地元の男性である。一人一人に詳しく話を聞くことは残念ながらできなかったのだが、皆ショーの最中は他の客よりも多くのチップをはずんでダンサーたちと言葉を交わし、終演後にもシアターの出口の通路に見送りに出てきてくれるダンサーたちと非常に親しいコミュニケーションをとっているように見えた。特に、女性3人組の方は、それぞれにお気に入りがあるようで、そのダンサーたちとはとりわけ親密そうな様子を見せていた。見ている限り、メンバーたちの日本語も決して流暢なものではなく、無論常連もタイ語を操れるわけではないが、ショーのホストとゲストとの商業的な関係性以上の、顔も名前も一致している者同士の束の間には育まれなであろう触れ合いがそこでは起こっていた。筆者は偶然一度に複数の常連と席を並べたわけだが、恐らくこうした人たちは他にも少なからずいるに違いない。

さて、以上が筆者の非常に限定的な観察ではあるが、日本の温泉地でタイ人ニューハーフショーが数十年に渡り行われ、地元にも十分浸透し、県内外からファンとなって通う常連もいるとは非常に特異な状況ではないだろうか。日本でも有数の温泉地にあるAシアターは、タイ人ニューハーフダンサーと日本人（客だけでなくホテルの従業員なども入るかもしれない）との国境を越えた、人によってはかなり親密な交流を局所的に、それでも持続的に生み出している極めて稀少な空間であり、そこには他ではみられないことが起こっているのではないだろうか。

Aシアターへと人を惹きつけるのは、なんといっても観たものの多くが「綺麗だ」と評するくらい高度に女性化され、洗練されたダンサーたちの身体的パフォーマンスが生み出すショーの魅力である。シアターの仕組みがその魅力を更に高めていることは言うまでもない。だが他方で、シアターが地元民も宴会で利用するホテルの施設内にあること、県内外からも比較的容易にアクセスのきく有名な温泉地にあるということ、そしてショーが20年近く続いているということ、これらの条件が合わさってリピーターが生まれているという側面が大きいはずだ。こうした複合的な要因によって、他の地ではみられない独自の状況がそこには生じていると考えてよい。

言うまでもなく、このショーそのものが成り立っていることの社会的、歴史的條件は更に複雑なものであろう。マクロ的にみれば、後でみるように政治、経済、文化活動のグローバル化を背景に、主に観光やビジネスで発生する人の移動を通して形成されたタイと日本との間の関わりがある。その他にも、両国のセクシャルマイノリティのサブカルチャー⁹⁾とその相互作用、日本側のホテル、旅館業の経営文化やトレンド、温泉観光業の栄枯盛衰、また入国管理法等の制度的側面の変遷といった複合的なファクターを分析対象とすることでこの現象を歴史的に捉え直すことができるだろう。

しかしやはり、民族誌学的にはそうした状況のなかにいる個々人のアクターの複雑な関心の絡み合いや現実の人

間関係こそ大きな意味をもつ。特に、これまで推測を交えて述べてきたようなダンサーと客との関係性の個別具体的な内実にはフォーカスしていかななくてはならない。片方は、異郷の日本の温泉地で、最低で半年、人によっては断続的に何年にも渡り寮で集団生活をしながらホテルのシアターでダンサーをしているタイ人ニューハーフであり、片方は温泉地の地元民やその他の県内外からやってきて同地に数日は滞在する温泉観光客である。ほとんどの場合は、ショーのホストとゲストという商業的な一回性の関係で終わるだろう。しかし、その中からは多様なリピーターが生まれ、ダンサーとの関わりを深めている。今回の調査で見ることができたのは、シアターのなかで衣装をまとったダンサーと客とが触れ合う場面に過ぎない。しかし、人それぞれの思いや関心があってタイから日本にやってきたニューハーフのダンサーが、極めてローカルな地域で働きながら過ごすなかでは、シアターの内に留まらずその外で、舞台を降りている時間にも、仕事を離れて様々な人間関係を築くことで自らの経験を豊かなものにしていくかもしれない。人類学がフォーカスし、記述してきたのはそうした人と人との関わりであり、この調査地においてもそれを明らかにしていくことができれば、タイ人ニューハーフをとりまく今日の状況への視座を手にし、人類学研究に寄与することができるのではないだろうか。

4. 日泰間のトランスナショナルな状況のなかのガトゥーイ

さて、今回は調査上の制約があり、主にシアターのなかで起こっていることしか観察することができず、従業員、ダンサー、ファン等からの聞き取りにも限界があったため、十分なデータを得ることはできなかったが、今述べてきたような考察の端緒を得ることはできた。宙づりのままの問題ばかりで、それらは個々に今後追加調査が可能であれば取り組み、再度報告の機会を設けたい。他方で、筆者は今回の調査を経て、今後の研究への1つの大局的な展望を描くことができた。最後に、その展望について概説することにした。

筆者が今回の調査で垣間見たのは、日本の温泉地にダンサーとして滞在するタイ人ニューハーフと日本人との間に生じているかなり局所的で例外的な状況でしかないが、そこから、より広く今日タイのガトゥーイと日本人とが人間関係を構築するような場面、及びそれを成り立たせる国際的な状況、それから特に日本とタイとの間の歴史の問題に関心が向くようになった。そして、グローバル化が進展するなかで1970年代以降、観光の発展や企業の国外展開を皮切りに生まれたタイと日本との間の経済、政治、文化的な関係性を念頭に置きつつ、今日の日本とタイのなかでガトゥーイが日本（人）と関わる場面を民族誌として記述することを通じ、その人々が置かれている両国間のトランスナショナルな現代的状況を明らかにするという研究の展望を持つようになった。そこで、まずガトゥーイの研究史を振り返ってみた時、自分の狙いを定めた領域は空白として残されていることがわかってきた。以下、その点について詳しく述べよう。

グローバル化の進展は、ローカルに埋め込まれていた地域や人々を、程度の差はあれ欧米を中心とする国際的な政治経済、文化状況のなかに引き入れていくが、非西欧圏の性別越境者たちもそうした地球規模の流動性とは無縁ではない。その人々は、古くは植民地化の過程で、現代では例えば観光のグローバル化を通して、間接、直接を問わず外部の社会や人間とつながりを持ち、現代的な情報や市場にアクセスし、更に、そうした外部との接触をきっかけとして国境を超えて移動もしてきた¹⁰⁾。中でもタイのガトゥーイは、こうした現代のグローバル化の動き、世界規模のトランスナショナルな状況に、早くからさらされてきた存在である。

タイは、国際的な保養地、観光地となってからの歴史が長い。ベトナム戦争下、タイ各地に米国兵士が常駐したり、バンコクがR&R (Rest and Recreation) の目的地となったりしたことで、アメリカ人男性がタイのセックスカルチャーのなかに入り込んだことが大きなそのきっかけとなった。そうした背景から生まれた性産業の膨張と並行して、60年代以降次第にタイ主要都市に今多くある歓楽街の相貌が整い、それが一つの大きな誘因となって日本人含め訪泰者が増加し、タイは毎年多くの外国人を迎え入れる観光立国へと成長した [日向 2021]。そして、タイの文化のなかで可視化されているガトゥーイは現地のヘテロシスジェンダーの女性の存在に負けず劣らず、観光客相手にその存在感を発揮してきた。豪華なレビューショーで鑑賞の対象になるだけでなく、性的関心を持つ男性たちをセックス・セクターにも惹きつけ、結果的にそこで起こる人間関係は単なる商売の域を超えて（バーでのワンドリンクだ

けの語らいからロマンティックラブ、そして結婚に至るまで) 様々なレベルにまで発展することも少なくなかった [Totman 2004]。さらに、場合によってはそうした交流を契機としてガトゥーイが多様な目的¹¹⁾で国外へ移動するケースも稀ではなかった [Pravattiyagul 2021; Thongkrajai 2022]。

このように、ガトゥーイはタイが早くから国際的観光地になったために、他の非西欧圏の性別越境者よりも外部と相互に浸透し合ってきた歴史が長く、領域も広いと言え、外国人との関係性のバリエーションも豊かであると推測される。しかし、そもそも数が少ないガトゥーイに関するこれまでの研究史を概観してみると、そうした事例の報告の多くは、タイ語でファラン (*farang*) と呼ばれる欧米の白人男性との関わり、あるいは欧米圏への移動に偏っているように思われた [Totman 2004; Pravattiyagul 2021; Thongkrajai 2022]。そして、日本人もまた訪泰者、在泰者のなかで欧米人と同等の存在感を示してきたことを思うと、海外の研究者はもとより日本の研究者がガトゥーイの存在に関心を向け、日本人との接触領域を記録してこなかったことは意外であった。無論、タイの観光業と密接に関わるセックス・セクターにおいて主要なアクターとなってきた日本人男性の存在が売春観光 [松井 1993] やセックス・ツーリズムという言葉とともに強調される傾向はあった [市野沢 2003] し、バンコクの日本人街を調査した研究 [日下 2000] もあった。しかし、そこから見えてくるのはあくまで日本人男性とタイ人女性の関係であり、日本のアカデミックなタイ研究のなかではガトゥーイ (レディーボーイ) の存在は不可視化されてきたと言える¹²⁾。

近年、欧米や日本よりも中国、マレーシア、インドといった国々からのタイへの観光客が圧倒的に多くなかタイと日本との関係を取上げ、しかもすでに存在のよく知られたガトゥーイの存在に注目するというと、ノスタルジーとアナクロニズムという誹りは免れないかもしれない。しかし、管見の範囲では、日泰間のトランスナショナルな状況のなかのガトゥーイという領域が人類学を含め学問の世界で専門的にとりあげられたことはなく、また日本国内の事情も視野にいれるとなれば端的に研究史の穴を埋めることには意義がある。また、タイ国内では数字の上で日本人の存在が目立たないものになっているとはいえ、例えばタニヤを始めとするバンコクの日本人街の存在、あるいは日本の都市部にいる多くのタイ人の存在を思い出す時、タイと日本との間に時代を通して築かれた関係が根強く残っているはずだ。グローバル化の様相も移り変わるなか、そうした日泰間の関係性の変化にも注意を払いつつ、そこにタイのセクシャルマイノリティがどのように関与してくるのかを調査することは、昨今 LGBTQ ツーリズムを推進¹³⁾したり、つい最近同性婚を正式に合法化¹⁴⁾したりといった動向を見せ多様化するタイの現状を踏まえても、その一端を可視化するという観点からも興味深いものとなるのではないだろうか。

おわりに

筆者は、4節で報告した調査内容とこれまでの研究史の概観を踏まえ、前節末尾で述べた問題提起を行い、研究を進めていきたいと考えている。いまだ展望に過ぎず具体性を伴っていないが、今後文献調査を進めつつ、タイのガトゥーイと日本人の関わる場面を日本とタイの両方で探すところから地歩を固めていきたい。日本国内では、今回の調査地のような事例は極めて稀で、実際にタイ人ニューハーフがいる場所を探し、更に接触を試みることは簡単ではないと予想される¹⁵⁾。そのため日本の状況には常にアンテナを張りつつ、タイでの調査が必須となる。幸いにして、筆者は早稲田大学大学院アジア太平洋研究科から2024年度原口記念アジア研究基金フィールド・リサーチ補助金の採択を受け、2025年2月にバンコクをメインのフィールドとしてタイで1ヶ月ほど調査を実施する予定である。タイを訪れたり、そこに住んだりする日本人は今も昔も多い。そうした人々とタイのガトゥーイとが接触し、交流する場面にできるだけ微視的なまなざしをそそぎ、現場から課題を持ち帰れるよう努めたい。

註

- 1) ホテル側の意向により、温泉地とホテル等の名前は伏せ、任意のアルファベットで表す。
- 2) タイの性文化のキー概念であるこの言葉は、いわゆるジェンダー（性自認）とセクシュアリティ（性的指向）とを区別していないとされる。例えば、欧米的観点からすればジェンダーに基づく区分となるはずのガトゥーイもセクシュアリティに基づくカテゴリーになるゲイも同様に *phet* のヴァリエーションとして理解されているらしい [Jackson & Sullivan 1999: 5-6]
- 3) 例えば「第二の女性 (second category woman)」を意味する “*sao praphet-sornng*” やトランスセクシュアル女性 (transsexual woman) という言葉から生まれた “*phuying kham-phet*” などがある。
- 4) ちなみに、こうしたトランス女性の職種と呼称との結び付きについては、レディーボーイや後述のニューハーフ以外にも例があるようだ。仏領ポリネシアには伝統的にマフ (*mahu*) と呼ばれ男性でありながら、女性的なしぐさや振る舞いをして、女性の社会的役割を担う人々がいるが、中でも 1960 年代以降、身体的女性化を進め、当時流入し始めたフランス軍人や観光客相手にナイトクラブで接客業についたり、売春を仕事にしたりする人々は新たにラエラエ (*raerae*) と呼ばれるようになり、結果的にラエラエはいわゆる「夜の仕事」を専門とする人々というステレオタイプ化が進んでいるらしい [桑原 2024]。また、話は変わるが、レディーボーイという呼称について、トランス女性をボーイ (boy) と呼ぶことは当事者の性自認を踏みにじるという批判もあるだろうが、本人たちがしばしばプライドを込めて使っていたとの報告もある [Jackson & Sullivan 1999: 1-2]。
- 5) ウェイトレス、レストランやバーのオーナー、化粧品販売員として働くガトゥーイがいることはよく耳にする。昨今、より多様な職種への進出が可能になっていると推測されるが、偏見や差別は厳然と存在しているためは職探しに困難な現実があり、それを理由に欧米に移住する当事者もいるようだ [Pravattiyagul 2021: 88-89]。
- 6) 例えば、第 1 部の演目の一つに、ダンサーが花魁のような格好で観客の笑いをとりながら都はるみの「愛しちゃって馬鹿みたい」を口パクで歌うものがあるが、これはバンコクの有名なシアターであるカリプソ (*calypso*) でも定番の一つである。
- 7) これは、高度に女性化されたダンサーたちのパフォーマンスが続く中、ニューハーフが男性でありつつ、女性でもある両性具有的な存在であることを改めて意識させる狙いがあると思われ興味深い。
- 8) Kyoto Review of Southeast Asia のウェブサイトに掲載された記事 [Khangpi boon 2022] に同様の衣装をきたガトゥーイの写真が載っている。
- 9) 例えば、日本にもニューハーフショーの半世紀近い歴史がある。詳しくは三橋 [2004] を参照。
- 10) 例えば、仏領ポリネシアのマフやラエラエについては [桑原 2024]、ラテンアメリカのトラヴェスティ (*travesti*) については [Vartabedian 2018] 等の報告がある。
- 11) 例えば売春を含む出稼ぎのため、あるいはタイ国内で親密な関係を築いた外国人のパートナーとしてその母国で暮らすためなどの例が挙げられる。
- 12) 最近、タイ文学研究者であり翻訳家である福富渉が X (旧 Twitter) 上で、従来「性的話ひとつとっても日本だといいたいところゴーゴーバーとかパッタヤー含む性産業についての分析か、あとはせいぜいカトゥーイのひとたちと一部のゲイのひとたち (トゥット) を特異な存在としてまつりあげて (ネタにして) 「性的多様性」をちょっと露悪なサブカル的に消費するのばっかりなような気も」 [福富 2024] と発言しており、個々の日本人研究者の仕事のなかでガトゥーイにも言及がなされるケースもあるのかもしれないが、専門的研究の蓄積が日本には皆無であることは関連する日本語論文が全くないことから明白である。それとは関係なく、この福富の指摘は真摯に受け止めた上で研究を行っていく必要があることは言うまでもない。
- 13) タイ国政府は観光庁を軸に、2012 年以降国策として LGBTQ ツーリズムを推進し、その分野で主導的位置を占めている。
- 14) 2024 年 6 月に議会を通過した法案が 2025 年 1 月に施行され、タイは東南アジア発の同性婚を認める国となる [BBC NEWS JAPAN 2024]。
- 15) 筆者は以前日本のいわゆるオカマバーでカウンターに立つタイ人と会ったことがある。また、昨今東京や横浜の路上で、売春目的で客引きをするタイ人「男性」が摘発されるといった報道にも接するし、日本に売春目的で出稼ぎにきているレディーボーイが多いというメディアの記事も多くある。どれも、在留資格の問題がからむ可能性がある微妙なケースであり、倫理的課題が残るが、こうした現状や動向を注視し続けたい。

引用文献一覧

Jackson, Peter A.

1999 “An American Death in Bangkok: The Murder of Darrell Berrigan and the Hybrid Origins of Gay Identity in 1960s’ Bangkok.”
In *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies*, 5(3): 361-411.

- 2000 “An Explosion of Thai Identities: Global Queering and Re-Imagining Queer Theory.” In *Culture, Health & Sexuality*, 2(4), 405–424.
- Jackson, Peter A & Sullivan, Gerard.
1999 “A Panoply of Roles: Sexual and Gender Diversity in Contemporary Thailand.” In *Lady Boys, Tom Boys, Rent Boys: Male and Female Homosexualities in Contemporary Thailand*, Peter A Jackson and Gerard Sullivan (eds), 1–27. London: Routledge.
- Käng, Dredge Byung'chu.
2012 “Kathoei “In Trend”: Emergent Genderscapes, National Anxieties and the Re-Signification of Male-Bodied Effeminacy in Thailand.” In *Asian Studies Review*, 36(4), 475–494.
- Khangpiboon, Kath.
2022 “Transgender Studies in the Kathoeis’ Community” *Kyoto Review of Southeast Asia*, <https://kyotoreview.org/issue-33/transgender-studies-in-the-kathoeis-community/>, 最終確認日：2024年11月22日。
- Morris, Rosalind.
1994 “Three sexes and four sexualities: Redressing the discourses on gender and sexuality in contemporary Thailand.” In *positions*, 2(1), 15–43.
- Pravattiyagul, Jutathorn.
2021 “Thai transgender women in Europe: Migration, gender and binational relationships.” In *Asian and Pacific Migration Journal*, 30(1), 79–101.
- Thongkrajai, Cheera.
2022 “Feminity in transition: Sex, gender, and sexuality experiences of Thai transgender migrants in Europe.” In *Advances in Southeast Asian Studies*, 15(2), 177–194.
- Totman, Richard.
2004 *The Third Sex Kathoei: Thailand's Ladyboys*. London: Souvenir Press.
- Vartabedian, Julieta.
2018 *Brazilian 'Travesti' Migrations: Gender, Sexualities and Embodiment Experiences*. London: Palgrave Macmillan.
- 市野沢潤平
2004 『ゴーゴーパーの経済人類学：バンコク中心部におけるセックスツーリズムに関する微視的研究』。東京：めこん。
- 桑原牧子
2024 「ポリネシアにおける多様な性の共生～マフトラエラエ～」, 笹川平和財団海洋政策研究所, https://www.spf.org/opri/newsletter/567_3.html, 最終確認日：2024年11月22日。
- BBC NEWS JAPAN
2024 「タイで同性カップルが婚姻可能に、来年1月から 国王が結婚平等法に署名」, BBC NEWS JAPAN, 最終確認日：2024年11月22日。
- 日向伸介
2021 「冷戦期タイにおける性的少数者の空間形成——パッタヤー歓楽街を事例として」『東南アジアと「LGBT」の政治——性的少数者をめぐって何が争われているのか』, 日下涉ほか編, 160–204, 東京：明石書店。
- 福富渉
2024X (旧 Twitter), <https://x.com/sh0f/status/1854644952594280928>, 最終確認日：2024年11月22日。
- 松井やより
1993 『アジアの観光開発と日本』。東京：新幹社。
- 三橋順子
2004 「ニューハーフ」『性の用語集』, 井上章一 & 関西性欲研究会編, 189–195, 東京：講談社。
2005 「トランスジェンダーと興行—戦後日本を中心に」『現代風俗：興行—イツショウタイム!—』, 現代風俗研究会編, 48–76, 東京：新宿書房。

謝辞

先方の御意向により本稿では名前を挙げることはできないが、Aホテルの従業員、ダンサーの方々、経営母体及び関連企業の方々、そして聞き取りを行った温泉地の地元民の方々に感謝申し上げます。